

亡き後も



介護認知症の着段普

百三歳の林さん(仮名・女性)がユアハウスを利用することになったのは、七十代の息子さんの入院が急に決まったためでした。

要介護5で認知症のある林さんは、息子さんと二人暮らし。ほぼ毎日の訪問介護と週二回のデイサービスを利用して息子さんが介護していました。が、ショートステイの空きがなく、担当のケアマネジャーからの依頼で急ぎよ、連泊することになったのです。

全く知らない場所での生活。本当は自分も不安がいっぱいはずだ。うちに、林さんは「息子の病状はどうですか? 主治医に話を聞きたい」と言います。しかし感染の心配などがあり、病院には行けません。そのことを伝えた上で「息子さんが退院するまで、ユアハウスで頑張りますよ」と目標を決めました。

当初はスタッフもなるべく声を掛け、一人にしないようにと気遣っていました。が、してほしいことがあれば大声で人を呼ぶ「根性」もあり、林さんはすぐになじんでいきました。

ハーモニカを持っていた

103歳母がつないだ縁

ので演奏してもらおうと、ブ口顔負けの腕前。大正琴も得意だと分かり、みんなの前で何度か演奏してもらいました。美声も自慢で、民謡や演歌を突然、真夜中に歌いだしたことも。さすがにその時は、昼間に歌うようお願いしました。

自宅に来ていたヘルパーさんたちも時々、会いに来ました。百三歳のお誕生日もユアハウスでお祝い。自分のペースで暮らす林さんに、スタッフは「百年生きる人は心身共に強いね」と感心していました。

約一カ月半で息子さんが退院し、自宅に戻る準備を少しずつ進めることに。一日三時間の帰宅を二週間ほど続けた後は、一日おきにユアハウスに宿泊するなどし、自宅中心の生活に戻しました。そろそろ前のサービスマスに戻るのでは?と考えていたころ、林さんは亡くなりました。

朝の七時ごろ、息子さんに「トイレに行きたい」と言って排せつを済ませ、ベッドに戻った林さん。一時



息子さんが病院で撮影した林さん(右)とスタッフ

写真通し、息子との交流続く

間後、息子さんが声を掛けたときには亡くなっていたそうです。知らせを受けた私たちはその夜、お別れをするため、仕事の後にご自宅を訪問しました。

最期の様子などをうかがっているうちに、息子さんが「僕ね、写真が趣味なんだ。そちらの皆さんと、ばあさんが写っている写真があるから、見ていきなさいよ」と写真や動画を見せてくれました。ユアハウスに面会に来た時や、スタッフと通院に付き添った時などに撮ったそうです。

亡くなった林さんの前で写真を一緒に見ていたら、息子さんが「ばあさんがいなくなったら、誰もここに来なくなるな」とひと言。その言葉と写真の林さんの姿がずっと心に残り、私は後日、ほかのスタッフたちに「写真ボランティアを息子さんにお願したい」と相談。みんな賛成してくれました。

息子さんは今、毎月二、三回、音楽療法のある日や日舞の先生が来る日にユアハウスに来て、利用者さんたちの写真を撮ってくれています。この後は紅葉狩りにクリスマスも…。頼りにしています!

◇ (横島真美 | ケアマネジャー・四十二歳)

小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」(東京都文京区)のスタッフが、介護の実践を報告する。

載 次回は十一月二十四日掲載